

## 中学生のスキルを測定する尺度の開発に関する研究の動向

筑波大学大学院（博）心理学研究科 飯田 順子

筑波大学心理学系 石隈 利紀

Development of scales measuring skills in junior high school students: An overview of studies

Junko Iida and Toshinori Ishikuma (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

As an increase in problem behavior of junior high school students, attention has been paid significantly to their skills for dealing with everyday tasks. While many kinds of scales measuring skills in junior high school students have been developed in the US and Europe, a scale that directly focuses on skills in junior high school students have not been developed yet in Japan. Thus, the present study conducted a review of 34 articles published in abroad that were associated with development of those scales for the purpose of trying to figure out what kind of skills should be contained in a scale that measures skills comprehensively of Japanese junior high school students. The result yielded 9 social skills scales, 2 study skills scales, 1 stress coping scale, 1 decision-making skills scale, 1 problem-solving scale, 1 school survival skills scale, 4 life skills scales. Those scales measure skills needed to deal with tasks in the areas corresponding to the framework of school psychology for supporting students, which includes 4 aspects: academic, psychological/social, career, and health. Therefore, it seems valid to develop a scale which measures skills in Japanese junior high school students using the framework of school psychology.

**Key words:** skills, scale, junior high school student, school psychology

### 問題と目的

不登校や少年犯罪の増加・低年齢化など中学生と関連する問題傾向の増加が指摘されている（内閣府，2002）。青少年の問題行動の発生率の高い欧米では，青年の反社会傾向や孤独感・うつ傾向などの問題傾向の背景に社会的スキルやライフスキルなど，日常生活の中で求められるスキルの欠如があることが以前から指摘されている。例えば，Wahler & Dumas（1986）は，反社会傾向を示す生徒の多くは社会的スキルが低いことを指摘している。また，Asher & Wheeler（1985）は，社会的スキルが子どもの孤独感やうつ傾向と強く関連していることを示している。このように，子どもの問題傾向の増加が深刻な社会問題として長く取り組まれている欧

米では，問題傾向の背景にある子どもたちのスキルに焦点を当てた研究が多々行われている。近年，日本においても，社会的スキルに焦点を当てた研究は増加傾向にある。例えば，社会的スキルの欠如は学校ストレスや学校における不適応状態を引き起こしやすいことが研究によって明らかにされている（戸ヶ崎・岡安・坂野，1997；戸ヶ崎・嶋田・坂野・上里，1995）。

スキルに焦点を当てた研究（例．スキルとその他心理学的変数の関連を検討する研究やスキルトレーニングの実践研究）を行うためには，スキルを測定するための尺度が必要となる。スキルに焦点を当てた様々な研究が行われている欧米では，多くのスキルを測定する尺度が開発されている：社会的スキル尺度（Gresham & Elliott, 1990; Matson, Rotatori,

& Helsel, 1983; Merrell, 1993; Riggio, 1986), スタディスキル尺度 (DuPaul, Rapport, & Perriello, 1991), ライフスキル尺度 (Darden, Ginter, & Gazda, 1996). 日本でも欧米で行われた研究を基に作成されたスキル尺度がいくつかある. 例えば, Goldstein, Sprafkin, Gershaw, & Klein (1980) が作成した若者のための社会的スキルのリストを基に菊池 (1988) が作成した Kikuchi's Social Skills Scale (KISS-18) や, Riggio (1986) が対人関係における情報のやりとりの過程に焦点を当てて作成した Social Skills Inventory (以下, SSI) を基に権野 (1988) が作成した日本版 SSI がある. ただし, これらの尺度は文章が比較的簡単で理解しやすいため中学生にも活用可能とされているが, 中学生のスキルを測定することを目的として作成された尺度ではない. また, これらの尺度は対人関係のスキルの測定に限定されており, 中学生が学校生活を送る上で求められる幅広い課題に取り組むためのスキルを測定することはできない.

上記のように, スキルに焦点を当てた研究は, 対人場面で効果的にふるまうためのスキルである社会的スキルに関する研究の中で行われているものが多い. 一方, 生徒は学校場面において対人関係に限らず, 学習面, 進路面, 健康面など幅広い課題に取り組むことが求められる. 心理教育的援助サービスの理論と実践を支える学問体系である学校心理学では, 生徒への援助サービスを学習面, 心理・社会面, 進路面, 健康面という4つの側面ととらえることを提唱している (石隈, 1999). そして, それらの領域の課題に取り組むために必要なスキルの欠如も, 社会的スキルと同じように問題傾向や学校における不適応状態に影響を及ぼすことが考えられる. 中学生の学校生活をサポートすることを考えると, 様々な側面のスキルを包括的にとらえることのできる尺度が必要となる.

以上のような現状をふまえ, 本研究は日本の中学生を対象とした包括的なスキル尺度の開発の前段階とし, 以下の2つのことを目的とする. 第1に, 欧米における中学生を調査対象範囲に含むスキル尺度の開発にかかわる研究を展望し, 開発されている尺度の特徴 (対象年齢, 対象領域) を検討する. 第2に, 各スキル領域で開発されているスキル尺度の特徴を検討し, 学校生活スキル尺度にどのようなスキルが含まれる必要があるのかを検討する. この2つのことを通して, 中学生のスキルを測定する尺度の開発に関する研究の課題と今後の研究の方向性を検討する.

## 方 法

以下の方法で文献検索を行った. American Psychological Association の PsycINFO を使用し, 1980年以降の過去20年間において発表された論文の中から, (junior high school, middle school, or adolescent), (skill), (scale or inventory) をキーワードに含む論文を検索した結果, 85の研究が抽出された. また, ここで検索されなかった学校心理学関係のスキルに焦点を当てた研究を検索するため, School Psychology Review の1980年代以降の目次をあたった. さらに抽出した論文に引用されていた尺度については, その尺度の開発についての原著論文に当たった. その結果, 1976年から1980年に作成された尺度が4つ含まれた. これらはいずれもその後の研究で繰り返し活用されている重要な尺度であるため, 1980年以前ではあるが採用した. その結果, 93の研究が得られた.

上記で得られた93の研究の中から, 次の2つの基準を用いてその後の分析の対象とする研究を選択した: (1) 調査研究を実施しており, スキル尺度を開発しているまたは既存のスキル尺度を実施している研究 (また尺度とは明記されていないがスキルを測定するための複数の項目が記述されている研究も含めた), (2) 被調査者に中学生 (13歳~16歳, 7年生~9年生) が含まれている研究. これら2つの基準にて各研究を検討した結果, 50の研究が基準を満たしていた. 次に, 実際のスキル項目を記載していない論文や, 本研究で含まれている尺度作成に関する先行研究の追試を行っており, 結果が同じものについて除外した結果, 16の研究が除外の対象となった. このような過程を経て, 最終的に34の論文を対象に文献研究を実施した.

## 結 果

### ①研究の特徴

上記の方法で得られた34の研究の第一著者, 出版年, 対象者, スキルの領域, 用いられているスキル尺度, 研究の特徴を Table 1 に示す. それらの研究の (1) 対象者, (2) スキルの領域についてまとめる.

(1) 調査対象範囲 調査対象範囲は大きく2つに分かれる. 1つは学校における年齢区分 (学年) で対象者を分けているものであり, それらは全研究の4割を占めていた. 学年を活用している研究でも, その対象範囲は様々であった. アメリカの教育制度 (高校までの義務教育制度, 幼稚園~12年までの教

育の一貫性の意識)の特徴と関連し、青年期を対象とした研究には中学生・高校生を7年生～12年生という形で一緒にしている研究が多く、5つの論文がその範囲を採用していた。また幼稚園～8年生、幼稚園～12年生、1年生～9年生という幅広い範囲を用いている研究がみられた。中学生を対象とした研究は2つあり、その他に特定の学年(7年生、8年生)を対象とした研究がみられた。発達の検討を行うため7年生、9年生、12年生を対象とした研究が1つと、5、6、7、8年生を対象とした研究が1つみられた。2つ目は、年齢のみが記載されている研究であり、それらは全ての研究の6割を占めていた。それらは大きく3つに分類することができる。第1の分類は、思春期・青年期前期と対応する年齢範囲(12歳～18歳の範囲以内)を対象とした研究であり、これらは全体の4分の1を占めた(9研究)。第2には、児童期・青年期前期と対応する年齢範囲(4歳～19歳に含まれる)を対象とした研究が4つみられた。第3には、青年期前期・後期と対応する年齢範囲(12歳～27歳に含まれる)を対象とした研究が2つみられた。

次に研究の対象者は主に通常学級に通う生徒と特定の臨床群(例、非行傾向を示す生徒)に分けることができた。通常学級に通う生徒を対象とした研究では、生徒のスキルの一般的な発達傾向を把握することに焦点がおかれているのに対し、特定の臨床群を対象とした研究ではその臨床群が示す問題の傾向とスキルの欠如の関連に焦点がおかれていた。前者に分類される研究は、全体の6割を超えていた(22研究)。特定の臨床群を対象とした研究では、非行青年を対象とした研究が7つあり最も多かった。その他には、軽度の知的障害を抱える生徒を対象とした研究(1)、行為障害(1)、注意欠陥多動性障害・反抗挑戦性障害(1)、聴覚障害(1)が含まれた。

(2) 研究領域の特徴 社会的スキル・社会的コンピテンス(以下、社会的スキル)に関する研究は19と圧倒的に多く、対象とした研究全体の半数以上を占めていた。社会的スキルに含まれる研究の中でも、社会的スキル全般を対象とした研究と、社会的スキルの特定の側面(対人認知的問題解決スキル、コミュニケーションスキル)に焦点を当てた研究がみられた。次に、スタディスキル・アカデミックスキル(以下、スタディスキル)に関する研究が9つあり、全体の4分の1を占めていた。ここでも全ての教科に共通して活用することができる一般的なスタディスキルに関する研究と、特定の教科に関連するスキルの研究(読みスキル、文法スキル、サイエンス・プロセススキル)に分かれた。ライフスキル尺

度を開発・活用している研究は5つ抽出された。また、スクール・サバイバルスキル尺度を用いている研究が2つ抽出された。この3つの研究領域の他に、ストレスコーピング、意思決定スキル、問題解決スキルに関する研究が1つずつ得られた。

## ②各スキル領域における尺度について

前述の各スキル領域で作成されているスキル尺度について、尺度名(開発者)、対象範囲、評定方法、下位尺度、心理統計的特徴についてまとめる(Table 2～Table 4)。各スキル領域は単一的な側面に焦点を当てているものと、生徒の持つスキルを包括的にとらえる試みのものと大きく2つに分類することができる。前者には、社会的スキル、スタディスキル、ストレスコーピング、意思決定スキル、問題解決スキルが含まれる。後者には、スクール・サバイバルスキル、ライフスキルが含まれる。以下、この順番で各スキル領域で作成された尺度について、その特徴を述べていく。

(1) 社会的スキルを測定する尺度 社会的スキルは、社会心理学、臨床心理学、障害児教育など様々な領域で、多くの研究がなされている。そのような背景から、社会的スキルの定義は実に多様であり、統一の見解は得られていないのが現状である。社会的スキルの定義に関して、Gresham(1986)が3つに分類している：『①仲間からの受け入れの定義』『②行動論的定義』『③社会的妥当性の定義』。どの立場で研究するかにより用いる測定方法や活用する尺度が異なる。①の立場を採用した研究では、仲間からの受け入れを測定するためにソシオメトリック法が最も頻繁に用いられる。②の立場をとる研究では、ある行動が生起する頻度やその行動への随伴刺激を行動観察によって測定する方法がとられる。③の立場をとる研究では、社会的スキルの理論や先行研究の知見を基に中核となる社会的スキルを明らかにし、それらスキルを測定する尺度やチェックリストを作成すると同時に、その行動が調査対象としている集団の中で機能的に役立つかということを検討する。現在は③の立場で行われる研究が多く、本研究で扱う社会的スキル尺度も具体的な行動を含みかつそれが調査対象とされる集団の中で機能的な行動かどうかを検討されているものが多く、③の立場で作成された尺度と言える。以下、各尺度の作成目的や主な特徴について述べる。なお各尺度の下位尺度や心理統計的特徴はTable 2に示す。

まずソシオメトリック法を応用して作成された測度に、The Pupil Evaluation Inventory(Pekarik, Prinz, Liebert, Weintraub, & Neale, 1976)がある。この測度は、左側に具体的な行動に関する35のスキ

Table 1 本研究の対象としたスキル研究

第一著者	出版年	対象者	スキルの領域	用いられているスキル尺度	研究の特徴
1 Pekarik	1976	1年生～9年生	社会的スキル	The Pupil Evaluation Inventory	The Pupil Evaluation Inventory の開発
2 Freedman	1978	14歳～27歳 非行青年	個人内スキル 対人スキル	The Adolescent Problem Inventory (API)	API の開発
3 Achenback	1979	12歳～16歳	社会的スキル	Child Behavior Checklist (CBCL)	CBCL の開発
4 Filipczak	1979	中学生 非行青年	スタディスキル 社会的スキル	Social Skills Questionnaires-self-report	PREP の効果検討
5 Landman	1980	中学生・高校生	ライフスキル	Tests for Everyday Living (TEL)	TEL の開発
6 Martin	1980	13歳～17歳 非行青年	社会的スキル	The Rathus Assertiveness Inventory	社会的スキルと主張性の関連
7 Gaffney	1981	平均年齢16歳 非行青年	社会的スキル	The Problem Inventory for Adolescent Girls (PIAG)	PIAG の妥当性の検討
8 Matson	1983	4歳～18歳	社会的スキル	Matson Evaluation of Social Skills with Youngsters (MESSY)	MESSY の開発
9 Field	1984	幼稚園～8年生	読解スキル	Developmental Reading Program's skills tests	認知的発達性の検討
10 Bording	1984	12歳～16歳 軽度知的障害	文法スキル	Brigance Diagnostic Inventory of Basic Skills (BDIBS)	フリータイムコンテンツジェンシーの効果検討
11 Dishion	1984	10年生 非行青年	対人スキル スタディスキル 仕事スキル	Adolescent Problem Inventory (API) Child Behavior Profile (CBP)	様々な領域のスキルの欠如と非行傾向の関連
12 Burns	1985	7年生～12年生	サイエンス・プロセ スキル	The Test of Integrated Process Skills II (TIPS II)	TIPS II の開発
13 Zigmund	1986	中学生・高校生	スクール・サバイバ ルスキル	School Survival Skills Scale (SSSS)	SSSS の開発と the School Survival Skills Curriculum の導入
14 Kennedy	1988	14歳～18歳	対人認知問題解決 スキル	The Adolescent Social Problem-Solving Scale (ASAP)	ICPS と moral reasoning とその他の適応領域の関連
15 Poole	1988	15歳～18歳	ライフスキル	The Questionnaire of Life Skills	様々なライフスキルの重要性やコンピテンスの検討
16 Staver	1990	8年生	サイエンス・プロセ スキル	The Test of Integrated Process Skills II (TIPS II)	活動基盤の理科のプログラムと教科書基盤の理科のプログラムの比較
17 Gresham	1990	中学生・高校生	社会的スキル	Social Skills Rating System (SSRS)-Teacher; Parent, Student Versions	SSRS の開発
18 Robin	1990	10歳～19歳	問題解決スキル コミュニケーション スキル	The Parent-Adolescent Relationship Questionnaire (PARQ)	PARQ の開発
19 Hover	1991	13歳～16歳	社会的スキル	The Adolescent Problem Inventory (API) The Problem Inventory for Adolescent Girls (PIAG)	社会的スキルと青年期の飲酒行動の関連

Table 1 続き

第一著者	出版年	対象者	スキルの領域	用いられているスキル尺度	研究の特徴
20 Walker	1991	7年生～12年生	社会的スキル	Walker-McConnell Scale of Social Competence and School Adjustment (Adolescent Version)	Walker-McConnell Scale の青年期版の開発
21 DuPaul	1991	1年生～6年生	スタディスキル	Academic Performance Rating Scale (APRS)	APRS の開発
22 Hawkins	1991	11歳～18歳 非行青年	社会的スキル	The Adolescent Problem Situation Inventory (APSI)	非行青年への認知行動的スキルトレーニングの効果検討
23 Inderbitzen	1992	7年生～12年生	社会的スキル	Teenage Inventory of Social Skills (TISS)	TISS の開発
24 Foley	1993	5, 6, 7, 8年生 行為障害	スクール・サバイバルスキル	School Survival Skills Scale (SSSS)	School Survival Skills Curriculum (M-SSC) の効果検討
25 Merrell	1993	幼稚園～12年生	社会的スキル	School Social Behavior Scales (SSBS)	SSBS の開発
26 Frankel	1994	7歳～11歳 注意欠陥多動性障害・ 反抗挑戦性障害	社会的スキル	Child Behavior Checklist (CBCL) Social Skills Rating System (SSRS) Pupil Evaluation Inventory (PEI)	CBCL の併存的妥当性の検討および社会的コミュニケーションの側面の検討
27 Germann	1996	7年生	サイエンス・プロセス スキル	Science Process Skills Inventory (SPSI)	SPSI の開発と生徒の実験計画を立てるスキルの研究の枠組みの検討
28 Cartledge	1996	12歳～21歳 聴覚障害	社会的スキル	SSRS-S の前の版 (Gresham&Elliott, 1987)	寮制度の学校と公立学校に通う聴覚障害を持つ生徒の社会的スキルの比較
29 Darden	1996	13歳～18歳	ライフスキル	Life-skills Development Scale-Adolescent Form (LSDS-B)	LSDS-B の開発
30 MacNeil	1997	中学生	社会的スキル	The Informal Teacher Rating Matrix (IRM)	IRM の特徴の検討と IRM の情報を基に作成した観察のためのチェックリストの検討
31 Beidel	1999	9歳～12歳	スタディスキル	The Perceived Self-Competence Scale for Children (PSCSC)	Testbusters program (内容…学習習慣, SQ3R, テストを受けるスキル) の効果検討
32 Griffith	2000	7, 9, 12年生	ストレスコーピング	The Coping Responses Inventory-Youth Form (CRI-Y)	ストレスコーピングストラテジーの使用における学年とストレスササーの影響の検討
33 Miller	2001	9年～11年	意思決定スキル	The Decision-Making-Competency Inventory (DMCI)	DMCI の開発と達成行動に影響を与える要因の検討
34 Kadish	2001	12歳～17歳 非行青年	ライフスキル	The Learning and Study Strategies Inventory-High School Version (LASSI-HS) Life-skills Development Scale-Juvenile Form (LSDS-JF)	LDDDS-JF の開発

Table 2 主な社会的スキル尺度

尺度名 (開発者)	対象範囲	評定方法	下位尺度	心理統計的特徴
1 The Pupil Evaluation Inventory (Pekarik, Prinz, Liebert, Weintraub, & Neale, 1976)	1年生～9年生	自己評定 仲間評定 教師評定 ノミネートされた件数	3つの下位尺度(35項目)：攻撃性, 引っ込み思案傾向, 人気	信頼性：内の一貫性, 評定者間信頼性, 再テスト信頼性 妥当性：併存的妥当性,
2 The Adolescent Problem Inventory (API; Freedman, Rosenthal, Donahoe, Schulndt, & McFall, 1978)	14歳～18歳	ロールプレー 9段階評定 (0, 全く良くない～8, とても良い)	場面の操作的分類：攻撃性を含む場面(6), 権威のある大人との関係の場面(21), 悪い気分を含む場面(2), 誘惑への抵抗を含む場面(8), その他(7), 計44場面	信頼性：内の一貫性 妥当性：弁別的妥当性
3 Child Behavior Checklist (CBCL; Achenback & Edelbrock, 1979)	12歳～16歳	保護者評定用 行動評定用 (1, 全く良く当てはまらない～よく当てはまる) 社会的コンピテンシー3段階評定 (平均以下～平均以上)	2つに分かれる：臨床尺度と社会的コンピテンシー下位尺度 臨床尺度(118項目)：分裂病質, 抑うつ, 会話困難, 強迫性, 心身症, 社会的引きこもり, 多動, 攻撃性, 非行 社会的コンピテンシー(20項目)：活動, 社会性, 学校	信頼性：評定者間信頼性, 再テスト信頼性 妥当性：弁別的妥当性
4 The Problem Inventory for Adolescent Girls (PIAG; Gaffney & McFall, 1981)	13歳～17歳	ロールプレー 5段階評定 (1, 全く良くない～5, とても良い)	場面の操作的分類：親との関わり(15), 教師・校長との関わり(10), 仲間との関わり(24), 警察(2), 雇用主(1), 計52項目	信頼性：評定者間信頼性 妥当性：弁別的妥当性
5 Matson Evaluation of Social Skill with Youngsters (MESSEY; Matson, Rotatori, & Helsei, 1983)	4歳～18歳	自己評定用 教師評定用 5段階評定	自己評定用(62項目)：適切な社会的スキル, 不適切な自己主張, 衝動性・抵抗, 自信過剰, 嫉妬・引っ込み思案 教師評定用(64項目)：適切な社会的スキル, 不適切な自己主張・衝動性	再テスト信頼性： 自己評定用：全項目 $r = .55$ 教師評定用：全項目 $r = .50$
6 The Social Skills Rating System (SSRS; Gresham & Elliott, 1990)	中学生・高校生	自己評定用 (SSRS-S) 保護者評定用 (SSRS-P) 教師評定用 (SSRS-T) 5段階評定 (決してない～しばしばある)	自己評定用(34項目)：4つの下位尺度(協力, 自己主張, 共感, 自己統制) 保護者評定用(70項目)：社会的スキル(協力, 自己主張, 責任, 自己統制), 問題行動(外在化, 内在化, 活動過多) 教師評定用(57項目)：社会的スキル(協力, 自己主張, 自己統制), 問題行動(外在化, 内在化, 活動過多)	信頼性：内の一貫性, 再テスト信頼性
7 The Walker-McConnell Scale of Social Competence and School Adjustment-Adolescent Version (WMS; Walker, Steiber, & Eisert, 1991)	7年生～12年生	他者評定 (教師) 5段階評定 (1, 決してない～5, しばしばある)	4つの下位尺度(48項目+臨床的使用のための5項目)：仲間関係(20項目), 学校適応(10項目), 自己統制(12項目), 共感性(6項目)	信頼性：内の一貫性, 再テスト信頼性 妥当性：因子の妥当性
8 The Teenage Inventory of Social Skills (TISS; Inderbitzen & Foster, 1992)	7年生～12年生 (調査は9・10年生に実施)	自己評定 6段階評定 (1, まったく当てはまらない～6, とてもよく当てはまる)	2つの下位尺度(40項目)：肯定尺度(20項目), 否定尺度(20項目)	信頼性：内の一貫性, 再テスト信頼性, 尺度間相関 妥当性：収束的妥当性, 弁別的妥当性, 内容的妥当性
9 The School Social Behavior Scales (SSBS; Merrell, 1993)	幼稚園児～12年生	他者評定 (教師&その他の学校関係者) 5段階評定 (1, 決してない～5, しばしばある)	2つの尺度に分かれる。計65項目 社会的コンピテンシー(尺度A)の因子分析：対人スキル(14), 自己管理(10), 学業スキル(8) 反社会的行動(尺度B)の因子分析：敬意・短気(14), 反社会的・攻撃的(10), 破壊的・要求的(9)	信頼性：内の一貫性, 再テスト信頼性, 評定者間信頼性, 測度の標準誤差 妥当性：内容的妥当性, 基準関連妥当性, 概念的妥当性, 弁別的妥当性

ル項目が並べられ、上の欄にはクラスメートの名前が並んでいる行列表からなる。生徒および教師は左側に並んでいるスキル項目に当てはまる生徒の欄のところに‘x’をつけ、その後各生徒は、同じスキル項目の中から自分の行動に当てはまる項目に○をつけるよう教示を受ける。この尺度は①の立場で仲間からの受け入れを測定できると同時に、具体的な行動の記述も含んでいるため自己評定尺度としても利用可能であり、有用性が高い測度である。抽出された34の研究の中でも Frankel & Myatt (1994) において利用されていた。

次に非行青年の社会的スキルを測定するために作成された測度が2つある。1つは、非行青年を対象とした測度 The Adolescent Problem Inventory (以下、API) で、Freedman, Rosenthal, Donahoe, Schlundt, & McFall (1978) によって作成されている。この測度は、本研究で対象とした研究の中でも3つの研究に利用されており、非行青年を対象とした研究で数多く利用されている (Dishion, Loeber, Stouthamer-Loeber, & Patterson, 1984; Hawkins, Jenson, Catalano, & Wells, 1991; Hover & Gaffney, 1991)。2つ目は、Freedman et al. (1978) の研究を基に、Gaffney & McFall (1981) が青年期の非行傾向を示す女子の社会的スキルを測定することを目的に作成した The Problem Inventory for Adolescent Girls (以下、PIAG) である。これら2つの測度は、非行青年が葛藤を抱えやすい場面の項目からなっており、非行青年にそのような場面にとどのような行動をとるかロールプレイで演じることを求めるものである。APIは機能的な行動から非機能的な行動まで9段階の評定基準が記載されているマニュアルに従って、評定者がビデオ録画された青年のロールプレイを基に評価する。PIAGも同様の方法で得点化されるが、評定は5段階で行われる。これらの研究の基本的な前提は、非行傾向を示す青年は葛藤を引き起こす特定の場面において、その葛藤を機能的に処理するスキルが欠如しているために問題を起こしやすくと考える。そのため、彼らが現在使用している不適切な行動を機能的なスキルで置き換える介入が目指される。そこでAPIやPIAGが果たす役割は、青年がどのような場面で葛藤を抱えやすいのか、その場面における彼らの現在の行動がどうなっているのか、機能的な目指すべき行動は何かという情報を明らかにすることである。

次に子どもが示す臨床的問題と社会的スキルを同時に測定できるという利点を持ち、多くの研究で活用されている測度に、Achenback & Edelbrock (1979) が作成した Child Behavior Checklist (以下、

CBCL) がある。本研究で対象とした研究の中でも2つの研究で利用されていた (Dishion et al., 1984; Frankel & Myatt, 1994)。この測度は6歳～11歳、12歳～16歳という各年齢段階で子どもが示す問題行動を分類するために作成されたチェックリストである。社会的コンピテンスに関する項目は、スポーツや一人遊びやお手伝いに参加する程度を測定する下位尺度『活動』、計画されたグループ活動への参加、友だちの数や話しかける頻度、他者との関わり、自立して課題をこなしたり遊んだりできる能力を測定する下位尺度『社会性』、教科学習における達成度や生徒の特殊学級の利用歴や成績、学校での問題行動を測定する下位尺度『学校』という3つの下位尺度からなっている。

上記の尺度はいずれも社会的スキルを測定する項目を含んでいるが、社会的スキルの測定を主な用途と明記していない。子どもの社会的スキルを測定するための尺度は、Matson et al. (1983) によって作成された Matson Evaluation of Social Skill with Youngsters (以下、MESSY) が最初の試みである。Matson et al. (1983) は、それまでの社会的スキルを測定する項目の作成に関する研究が、研究者の先験的な仮説に基づいて行われていることを指摘し、対人的な言語的・非言語的行動や強化を最大にする状況に関する先行研究や、CBCLを含む社会的スキルを測定する項目に関する先行研究を幅広く網羅し、92項目からなる MESSY のための項目を収集した。それを基に子ども422名と、子ども322名の教師を対象に調査を実施した結果から、自己評定用・教師評定用の MESSY を作成している。このような過程を経ているため、MESSY は妥当性が比較的高い尺度と言える。

子どもの学校適応や学業成績と社会的スキルの関連を指摘する研究が増加すると共に、学校で社会的スキルを教育するプログラムが増加した。そのような背景から、1990年以降学校での使用を強く意図した社会的スキル尺度が次々と作成された。ここでは代表的な3つの尺度について述べる。第1の尺度は、Gresham & Elliott (1990) によって作成された The Social Skills Rating System (以下、SSRS) である。これは数ある社会的スキル尺度の中で、最も技術的に優れた評定システムとされており、多くの学校ベースの研究で活用されている (Walker, Stieber, & Eisert, 1991)。本研究で対象とした研究の中でも2つの研究で活用されている (Cartledge, Cochran, & Paul, 1996; Frankel & Myatt, 1994)。この評定システムには、自己報告用、教師評定用、保護者評定用と別々のフォームがあり、幼稚園、小

学校、中学校・高校用がある。自己評定用・教師評定用・保護者評定用でそれぞれ項目数も含まれている下位尺度も異なっている (Table 2)。

第2の尺度は、Walker et al. (1991) が作成した青年期版の Walker-McConnell Scale of Social Competence and School Adjustment (以下、WMS) である。これも、学校場面で多く利用されている尺度の1つである。この尺度の特徴は、SSRS と対応する『自己統制』『共感性』『仲間関係』といった社会的スキルの側面を測定する下位尺度の他に、『学校適応』の下位尺度を含んでいることである。学校適応の下位尺度は、主に学業達成行動 (例、「適切なレベルの課題を完成させる」「席に座って課題をこなしている」「良い勉強の習慣を持っている」) を測定している。

第3の尺度は Merrell (1993) が開発した the School Social Behavior Scales (以下、SSBS) である。Merrell (1993) は、SSRS では主に肯定的な社会的行動に焦点が向けられているため社会的問題行動を測定する項目が十分でないこと、WMS では社会的スキルと適応的な学習行動のアセスメントに適した尺度であるが、問題行動のアセスメント要素を含んでいないことを指摘した上で、社会的コンピテンスと反社会的行動を包括的にとらえることができる尺度を目指して、SSBS を開発した。社会的コンピテンスと同時に、『敵意・短気』『反社会的・攻撃性』『破壊的・要求的』という反社会的行動の側面が測定できる点で有用性がある。

最後に、Inderbitzen & Foster (1992) によって作成された The Teenage Inventory of Social Skills (以下、TISS) の特徴を述べる。社会的スキルを測定する多くの尺度は、幼児や子ども、または一般成人を対象とした研究から得られた社会的スキルの理論に基づいて作成されている。そのため、SSBS のように対象範囲が幼児～12年生と非常に幅広いものや、SSRS と WMS のように対象範囲は青年期とされているが、幼児や小学生を対象として作成された項目を修正・追加して作成されたものが多い。そのような中、TISS は肯定的な仲間関係を維持するために重要なスキルは発達段階ごとに変わるという前提に基づき、青年期特有の友人関係に必要な社会的スキルを測定する目的で作成されている点で、独自性がある。尺度の開発段階でも、社会的スキルの先行研究と同時に青年期の仲間関係や友情に関する先行研究を基に項目を作成し、また各項目に対し①各項目が仲間の好き嫌いを決定するのにどの程度影響するか、②各項目の社会的望ましさ (good-bad)、③自分が行う頻度という3点について、対象範囲に

ある青年に回答を求めた上で、最終的な項目を作成している。そのため、TISS は、青年期の友人関係に必要な社会的スキルを測定する尺度として、内容の妥当性が高いと言える。

(2) **スタディスキルに関連する尺度** スタディスキルとは、効果的な学習を行うためのこつや学習習慣を維持するための行動である。スタディスキルに関する研究は義務教育課程における学習が始まる小学生を対象としたものが多く、中学生以降を対象とした研究は非常に少ない。中学生のスタディスキルを測定するために作成された尺度は、検索されなかった。

スタディスキルに関する項目は前述の社会的スキルを測定するための尺度のいくつかに含まれている。例えば、前述の Walker et al. (1991) によって作成された WMS の下位尺度である『学校適応』は、具体的な学業達成行動を測定する項目 (例、「適切なレベルの課題を完成させる」) を含んでいる。また Merrell (1993) によって作成された SSBS も、社会的スキルの1つの下位尺度としてアカデミックスキルを含んでいる。Merrell (1993) のアカデミックスキルに含まれる項目は、「促されることなく個別のワークシート課題を終わらせることができる」「教師の指示を聞き、実行する」「必要なとき適切に援助を求められる」などがある。

一方、DuPaul et al. (1991) はこれら社会的スキル尺度に含まれるスタディスキルの項目は以下の点で十分でないとしている：(1) 様々な教科にわたる学業の達成と正確性をターゲットとするには項目で用いていることばがあまりにも一般的すぎる、(2) 学業成績に基づいた測度との関連を検討した結果によって妥当性を確認できていない、(3) 繰り返し用いることを想定した場合、項目数が多く全ての項目に答えないといけないということが実施を難しくする。以上のことを踏まえ、DuPaul et al. (1991) は小学生の持つスタディスキルを教師が評定するための尺度、『Academic Performance Rating Scale (以下、APRS)』を作成している。同様に、中学生を対象とした尺度ではないが、Miller & Byrnes (2001) の研究において高校生を対象にスタディスキルを測定する尺度 the Learning and Study Strategies Inventory-High School Version (LASSI-HS; Weinstein & Palmer, 1990) が用いられている。APRS と LASSI-HS は、項目の内容が容易であることや質問の量が少ないことから、中学生でも実施可能と考えられる。これら2つのスタディスキルを測定する尺度を Table 3に示す。

前述のように中学生を対象としたスタディスキル

Table 3 その他のスキル尺度

尺度名 (開発者)	対象範囲	評定方法	下位尺度	心理統計的特徴
スタディスキル the Academic Performance Rating Scale (APRS; DuPaul, Rapport, & Perriello, 1991)	小学生	教師評定 5件法 (1. 決していないまたは 乏しい～5. 頻繁にするまたは 素晴らしい)	3つの下位尺度, 計19項目: 学業達成 (7項目), 衝動コントロール (3項目), 学業的生産性 (12項目)	信頼性: 内的一貫性, 再テスト 信頼性 妥当性: 基準関連妥当性, 拡散 的妥当性, 弁別的妥当性 信頼性: 内的一貫性
the Learning and Study Strategies inventory-High School Version (LASSI-HS; Weinstein & Palmer, 1990)	9年生～12年生	自己評定 5件法 (1. 全く当てはまらな い～5. とてもよく当てはま る)	3つの下位尺度, 計23項目: 動機づけ, 時間 管理, 集中	信頼性: 内的一貫性
ストレスコーピング the Coping Responses Inventory- Youth Form (CRI-Y; Moos, 1990)	7年生～12年生	自己評定 4件法。各コーピングを活用す る頻度を答える。(0. いいえ ～3. はい, しばしば)	8つの下位尺度, 計48項目: 認知的アプローチ チ (論理的分析, 肯定的評価), 行動的アプ ローチ (指導・援助要請, 問題解決), 認知的 回避 (認知的回避, あきらめの受容), 行動的 回避 (代価報酬の探索, 感情の開放)	信頼性: 内的一貫性 妥当性: 弁別的妥当性
意思決定スキル the Decision Making Competency Inventory (DMCI; Miller & Byr- nes, 2001)	9年生～12年生	自己評定 5件法 (1. 全く当てはまらな い～5. とてもよく当てはま る)	4つの下位尺度, 計20項目: 情報に基づいた 認識 (7項目), 自己内評価 (6項目), 自律 性 (5項目), 自信 (2項目)	信頼性: 内的一貫性 妥当性: 弁別的妥当性
問題解決スキル the Parent-Adolescent Relationship Questionnaire (PARQ; Robin, Koeplke, & Moye, 1990)	10歳～19歳	青年版 保護者版 (父親用・母親用) True/Falseで回答	3つ (①スキル欠如と明らかな葛藤, ②信念 と期待, ③家族構造) の側面を測定する16尺 度, 計287項目からなる。 ①スキル欠如…問題解決 (26項目)	信頼性: 内的一貫性 妥当性: 基準関連妥当性
スクール・サバイバルスキル the School Survival Skills Scale (SSSS; Zigmond, Kerr, Schaeffer, Brown, & Farra, 1986)	1年生～8年生	教師評定 4件法 (1. 決していない～4. いつもそうである)	6つの下位尺度, 計26項目: 学校への関心, 整理スキル, 課題完成, 自立性, 対人スキル, 学校規則に従うこと	信頼性: 再テスト信頼性 妥当性: 基準関連妥当性

を測定する尺度開発の研究はみられないが、各教科・各分野の学習に特有のスキルを測定する尺度開発の研究がいくつかある。まず Bording, McLaughlin, & Williams (1984) は、12歳～16歳の特殊教育学級に在籍する生徒を対象とし、彼らの文法スキルに焦点を当てた研究を行っている。この研究では文法スキルを測定するために、頭文字に関する下位検査2つ、句読点に関する下位検査、文章とそうでないものを区別する下位検査、スピーチに関する下位検査、計5つの下位検査からなる Brigance Diagnostic Inventory of Basic Skills と教師評定による生徒の文法スキルに関する質問項目が用いられている。また、中学生の理科に関して、サイエンス・プロセススキルを測定する尺度を開発・活用した研究がある (Burns, Okey, & Wise, 1985; Germann, Aram, & Burke, 1996; Staver & Small, 1990)。サイエンス・プロセススキルを測定する代表的な尺度に The Test of Integrated Process Skills II (TIPS II; Burns et al., 1985) がある。TIPS II は、以下の5つの特定のプロセススキルを測定する36項目からなっている：『変数を明らかにするスキル (12項目)』『仮説を明らかにし述べるスキル (9項目)』『操作的に定義するスキル (6項目)』『調査を計画するスキル (3項目)』『グラフを描きデータを解釈するスキル (6項目)』。このテストは信頼性・妥当性も検討されている。

(3) **ストレスコーピング** ストレスコーピングでは、自分にストレスが生じていることを意識し、ストレスナーとなっている状況に適したコーピング行動を選択・実行することが重要とされている (Griffith, Dubow, & Ippolito, 2000)。ストレスコーピングはある程度の認知的発達を必要とする行動である。そのため、ストレスコーピングに関する研究は、大学生以降を対象とした研究がほとんどであり (Endler & Parker, 1990; Holahan & Moos, 1987; Tobin, Holroyd, Reynolds, & Wigal, 1989)、児童生徒を対象とした研究は少ない。検索の結果得られた中学生を調査対象に含むストレスコーピングを測定する尺度を活用した研究は1つであった。Griffith et al. (2000) は、Moos (1990) が作成した the Coping Responses Inventory-Youth Form (以下、CRI-Y) を用いた研究を行っている。Griffith et al. (2000) の研究において、7年生、9年生、12年生の被調査者は、3種類のストレスナー (学校ストレスナー、仲間ストレスナー、家族ストレスナー) に対してどの程度 CRI-Y に含まれている48のストレスコーピングを活用したか回答を求められた。彼らの回答を基に主因子法・バリマックス回転による

因子分析を実施した結果、2因子が抽出され、第1因子は『接近コーピング』、第2因子は『回避コーピング』と命名された。Moos (1990) は CRI-Y を概念的に生み出された8つの下位尺度から作成しているが、Griffith et al. (2000) の研究では2因子構造が得られている。

(4) **意思決定スキル** 意思決定スキルとは、生活に関する決定を建設的に行うためのスキルである (WHO, 1994)。中学生の意思決定スキルを測定するのに用いることのできる尺度に Miller & Byrnes (2001) が作成した The Decision Making Competency Inventory (以下、DMCI) がある。この尺度は、大きな決断をする場面で自分がとる意思決定の方法について、5件法で尋ねるものである。また、この年代の意思決定の場面として、大学に進学するかどうかや飲酒・薬物の使用についての意思決定などが教示の中に例として挙げられている。尺度作成過程では、意思決定に関する先行研究に基づき、3つの下位尺度 (『メタ認知』『動機づけ』『行動』) が想定され、30項目が作成された。それを基に調査を実施した結果、10項目が除外され20項目からなる DMCI が作成された。DMCI の20項目について主成分分解・バリマックス回転による因子分析を実施したところ、4因子が抽出され52%の分散が説明された。4因子は、意思決定をする前に十分な情報や過去の経験について考えるスキルからなる『情報に基づいた認識』、選択した結果に影響を及ぼす注意深く考える個人の性質からなる『自己内評価』、批判的に選択肢を評価し選択することにおける決断力に関する項目からなる『自律性』、適切な選択をすることにおける自信を測定する『自信』からなっている。ただし、この研究では各下位尺度間の相関が高いこと、および項目のこぼの方向性の影響がみられることから (例、逆転項目同士まとまる)、その後の分析においては DMCI の合計得点のみを用いている。

(5) **問題解決スキル** 問題解決スキルとは、日常の問題を建設的に処理することを可能にするスキルである (WHO, 1994)。問題解決スキルを測定する項目を含んだ中学生を対象範囲に含んでいる尺度に、The Parent-Adolescent Relationship Questionnaire (PARQ; Robin, Koepke, & Moye, 1990) がある。この尺度は青年期 (10歳～19歳) の親子関係を多面的にとらえるための尺度で、家族の機能に関する理論を基に、①スキルの欠如と明らかな葛藤、②信念と期待、③家族構造という家族の3つの側面を測定する16の尺度からなっている。回答方法は父親・母親・青年それぞれ自己評定形式の質問紙に

True/False の 2 件法で回答する。青年版に含まれる問題解決スキル尺度は26項目からなっており、それらは「問題を察知することができる」、「問題を明快に定義することができる」、「解決策をいくつか挙げることができる」、「出てきた解決策を評価することができる」、「同意にたどりつくことができる」といったスキル項目からなっている。

(6) スクール・サバイバルスキル スクール・サバイバルスキルとは、「学業で成功を収める可能性を高める行動」である (Foley & Epstein, 1993)。Foley & Epstein (1993) は、Zigmond, Kerr, Schaeffer, Brown, & Farra (1986) が作成した School Survival Skills Scale (以下, SSSS) を用いて、the School Survival Skills Curriculum と呼ばれる生徒の学習行動の多数の側面に働きかける介入の効果を検討している。SSSS は26項目からなる尺度で通常学級の教師が6つの側面のスクール・サバイバルスキルを包括的にとらえるための尺度である。6つの側面は、学校に興味を示す程度を測定する指標として課題に向けられた行動を測定する『学校への関心』、時間や情報を効率的に操作するスキルを測定する『整理スキル』、教材をまとめたり学業課題を完成するためのスキルを測定する『課題完成』、授業中自立した学習者として機能するためのスキルを測定する『自立性』、教師とのより良い対人関係を築くスキルであり、教師の指示に従うスキルを測定する『対人スキル』、教室内のルールに従うスキルを測定する『学校規則に従うこと』からなっている。これらのスクール・サバイバルスキルは、高い学業達成を修めるために求められるスキルとされており、学習がうまくいっていない生徒 (例、行為障害を抱える生徒など) に対し、これらのスキルに働きかける介入を行うことが推奨されている。Foley & Epstein (1993) は、介入によりこれらのスキルを高めることができることを実証している。

(7) ライフスキル ライフスキルとは「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力 (WHO, 1994)」であり、WHO (1994) を中心に多くの研究者が健康的な発達・機能に必要な様々な領域のスキルを包括的にとらえる試みを行っている。中学生を含む青年期を対象としたライフスキルを測定する4つの尺度を Table 4 に示す。これらの尺度は2つの流れに分類することができる。1つは、日常生活・社会生活を効果的に過ごすために必要な幅広い行動をライフスキルとしてとらえる試みである。Landman, Irvin, & Halpern (1980) によって作成された Tests for Everyday Living (以下, TEL) は、

青年期のライフスキルを測定することを目的とした尺度作成の先駆的研究である。この尺度が作成されるまでは、ベーシックスキルとして伝統的な学業中心のコンピテンシー (読み、書き、計算など) を測定する尺度作成に関する研究がほとんどであった (Landman et al., 1980)。彼らはベーシックスキルの学習は自動的には現実生活のパフォーマンスには移行しないことを指摘し、日常生活を効果的に送るために必要なスキルであるライフスキルを測定する尺度の必要性を主張した。そして7つのライフスキルテストとその合計得点および基本的な読み尺度という9つの得点を算出することができる TEL を作成した。TEL は、中学生・高校生を対象にそれぞれ標準化されている。Poole & Evans (1988) によって作成された The Questionnaire of Life Skills もこの流れに含まれる。

一方、1984年以降に作成されたライフスキル尺度は、Brooks (1984) の提案したライフスキルの枠組みに基づいているものが多く、理論に基づいた包括性と発達の視点という特徴を持っている点で、それ以前のライフスキル研究とは異なっている。Brooks (1984) の理論に基づいて作成された青年期を対象とした尺度には次の2つがある。1つは、Darden et al. (1996) が青年 (13歳~18歳) を対象として作成した Life-Skills Development Scale-Adolescent Form, 65-item version (以下, LSDS-B) である。もう1つは、LSDS-B を基に、非行青年のライフスキルを測定するために作成された The Life-Skill Development Scale-Juvenile Form (Kadish, Glaser, Calhoun, & Ginter, 2001) である。この尺度は、LSDS-B を非行少年に実施した結果みられた3つの問題点 (LSDS-B で使用されていることばの難しさ、使用されている単語のいくつかが非行少年の文化で用いられることばと一致しない点、項目数が多い点) を改善し作成された尺度で、計30項目からなっている。

## 考 察

### ①本研究のまとめ

過去20年間における中学生を対象範囲に含むスキルを測定する尺度の開発に関する研究を検索した結果、34の研究論文が文献研究の対象となった。まず、調査対象者の特徴に関して、学校における年齢区分によるものと、年齢による区分によるものに分けられた。次に、対象者について、通常学級に通う生徒を対象とした研究と特定の臨床群を対象とした研究に分けられた。次に研究領域に関して、社会的

Table 4 ライフスキズ尺度

尺度名 (開発者)	対象範囲	評定方法	下位尺度	心理統計的特徴
1 Tests for Everyday Living (TEL: Landman, Irvin, & Halpern, 1980)	7年生~12年生	自己評定 各項目3つの選択肢 教師が項目および選択肢を 読み上げる	7つのスキルテスト: 買い物 (35項目), 預金 (37項目), 家計 (34項目), ヘルスクエア (34項目), 家の管理 (36項目), 職探し (36項目), 仕事関連の行動 (33項目), 合計得点 (245項目), 読み尺度 (36項目)	信頼性: 内的一貫性 妥当性: 内容的妥当性 中学生 (7年生~9年生), 高校生 (10年生~12年生) で標準化
2 The Questionnaire of Life Skills (Poole & Evans, 1988)	15歳~18歳	自己評定 4件法: 重要度, 知識, コンピテンツ, 改善の程度, 問題意識, 努力の程度についてそれぞれたずねている	6つのグループ, 計15項目: 対人関係 (2項目), レジヤ-と親密性 (2項目), 適応 (4項目), 博識 (3項目), 社会的責任 (3項目), 計画 (1項目)	記述なし
3 The Life-Skill Development Scale-Adolescent Form (Darden, Ginter, & Gazda, 1996)	13歳~18歳	自己評定 4件法 (1. とてもそう思う~4. 全くそう思わない)	4つの下位尺度, 計65項目: 対人コミュニケーション・人間関係スキル (15項目), 問題解決・意思決定スキル (15項目), 身体的フィットネス・健康維持スキル (15項目), アイデンティティ発達・人生の目的スキル (20項目)	信頼性: 内的一貫性 妥当性: 収束的妥当性, 弁別的妥当性
4 The Life-Skill Development Scale-Juvenile Form (Kadish, Glaser, Callhoun, & Ginter, 2001)	12歳~17歳	自己評定 4件法 (1. とてもそう思う~4. 全くそう思わない)	4つの下位尺度, 計30項目: 対人コミュニケーション・人間関係スキル (8項目), 問題解決・意思決定スキル (7項目), 身体的フィットネス・健康維持スキル (7項目), アイデンティティ発達・人生の目的スキル (8項目)	信頼性: 内的一貫性 (やや低い) 妥当性: 概念的妥当性

スキルに関する研究が半数以上を占め、その他にスタディスキル、ライフスキル、ストレスコーピング、意思決定スキル、問題解決スキル、スクール・サバイバルスキルに関する研究がみられた。最終的に、社会的スキルに関連する測定尺度9、スタディスキル2（中学生が対象範囲に記載されているものは0）、ストレスコーピング1、意思決定スキル1、問題解決スキル1、スクール・サバイバルスキル1、ライフスキル4が得られた。ほとんどの尺度はある程度の信頼性・妥当性が確認されており、中学生のスキルの状態を測定するのに利用可能であることが示されていた。

本研究で得られた前述の中学生を対象範囲に含むスキル尺度は、概ね学校心理学の心理教育的援助サービスの4つの側面と対応する領域のスキルを測定していた。それは、スタディスキルは学習面、社会的スキルは心理・社会面、意思決定スキル・問題解決スキルは進路面、ストレスコーピングは健康面とそれぞれ対応していると考えられる。またライフスキル研究におけるBrooks (1994) の4セット8スキルの理論的枠組みも学校心理学の援助サービスの側面と概ね対応していると考えられることができる。以上の結果から、学校心理学の枠組みを用いて中学生のスキルを包括的に測定する尺度を作成することの妥当性が支持された。

## ②研究の課題と今後の方向性

過去20年間における中学生を含む青年期を対象としたスキル尺度の開発に関する研究の動向を展望した結果から、スキル尺度の開発に関する研究の課題と今後の研究の方向性について2点述べる。

第1に、青年期を対象としたスキル尺度は欧米においても非常に数が少ない現状が示された。特にスタディスキルや意思決定スキル、問題解決スキルなど学校における教育課題に取り組む上で重要と考えられるこれらスキルの測定尺度はほとんど作成されていない。また青年を対象とした社会的スキルの測定尺度はいくつか存在するが、それらの多くは前述のように幼児や一般成人を対象とした研究から得られた理論に基づいて作成された幼児用・小学生用・一般成人用スキル尺度に修正・追加して作成されたものである。肯定的な仲間関係を維持するために求められるスキルは発達段階ごとに変わることをInderbitzen & Foster (1992) が指摘しているように、学習の課題、進路面の課題、対人関係の課題（友人関係、教師との関係、両親との関係）、健康維持の課題で求められるスキルも各発達段階で異なることが考えられる。青年を対象とした実証的な研究に基づいたスキル尺度の開発が求められている。

第2に、現在まで開発されてきたスキル尺度の多くは、生徒の特定の側面を測定するためのものが多い（例、社会的スキル、スタディスキル）。単一的なスキルの側面を詳細に検討する尺度は、生徒の示す苦戦の領域が明らかになっている場合に有効である。一方、学校場面で多くの生徒の中から援助を必要としている生徒をスクリーニングすることや、生徒の様々な側面の中から苦戦している領域を把握するためには、生徒の援助ニーズを包括的にとらえることのできるスキル尺度が必要である。包括的なスキル尺度を実施した結果、特定の領域のスキルの獲得・遂行の問題が示された場合、さらにその領域のスキルを測定するための尺度で詳細に問題を検討することができる。例えば、ライフスキル尺度で対人コミュニケーションスキルが低いことが明らかになった場合、コミュニケーションスキル尺度を用いて発話レベル・理解レベル・文脈の把握レベルのどのレベルに問題が生じているのかを明らかにするなど、包括的な尺度と領域が限定されている詳細な尺度を併用することで、生徒をよりよく理解することができる。現在のところ、包括的なスキル尺度は日本では開発されておらず、この尺度の開発は早急に行われる必要がある。

## 引用文献

- Achenback, T.M. & Edelbrock, C.S. 1979 The Child Behavior Profile II: Boys aged 12-16 & girls aged 6-11, 12-16. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 223-233.
- Asher, S.R. & Wheeler, V.A. 1985 Children's loneliness: A comparison of rejected and neglected peer status. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 53, 500-505.
- Beidel, D.C., Turner, S.M. & Taylor-Ferreira, J.C. 1999 Teaching study skills and test-taking strategies to elementary school students: The Testbusters Program. *Behavior Modification*, 23, 630-646.
- Bording, C., McLaughlin, T.F. & Williams, R.L. 1984 Effects of free time on grammar skills of adolescent handicapped students. *Journal of Educational Research*, 77, 312-318.
- Brooks, D.K., Jr. 1984 A life-skills taxonomy: Defining elements of effective functioning through the use of Delphi technique. Unpublished dissertation, University of Georgia, Athens, GA.

- Burns, J.C., Okey, J.R. & Wise, K.C. 1985 Development of an integrated process skill test: TIPS II. *Journal of Research in Science Teaching*, 22, 169-177.
- Cartledge, G., Cochran, L. & Paul, P. 1996 Social skill self-assessments by adolescents with hearing impairment in residential and public schools. *Remedial and Special Education*, 17, 30-36.
- Darden, C.A., Ginter, E.J. & Gazda, G.M. 1996 Life-Skills Development Scale-Adolescent Form: The theoretical and therapeutic relevance of life-skills. *Journal of Mental Health Counseling*, 18, 142-163.
- Dishion, T.J., Loeber, R., Stouthamer-Loeber, M. & Patterson, G.R. 1984 Skill deficits and male adolescent delinquency. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 12, 37-54.
- DuPaul, G.J., Rapport, M.D. & Perriello, L.M. 1991 Teacher ratings of academic skills: The development of the Academic Performance Rating Scale. *School Psychology Review*, 20, 284-300.
- Endler, N.S. & Parker, J.D.A. 1990 Multidimensional assessment of coping: A critical evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 844-854.
- Field, T.H. 1984 The role of cognitive development in the acquisition of reading skills. *Dissertation-Abstracts-International*, 45, 396.
- Filipczak, J. & Wodarski, J.S. 1979 Behavioral intervention in public schools: Implementing and evaluating a model. *Corrective and Social Psychiatry and Journal of Behavior Technology, Methods, and Therapy*, 25, 104-116.
- Foley, R.M. & Epstein, M.H. 1993 A structured instructional system for developing the school survival skills of adolescents with behavioral disorders. *Behavioral Disorders*, 18, 139-147.
- Frankel, F. & Myatt, R. 1994 A dimensional approach to the assessment of social competence in boys. *Psychological Assessment*, 6, 249-254.
- Freedman, B.J., Rosenthal, L., Donahoe, C.P., Schlundt, D.G. & McFall, R.M. 1978 A social-behavioral analysis of skill deficits in delinquent and nondelinquent adolescent boys. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 46, 1448-1462.
- Gaffney, L.R. & McFall, R.M. 1981 A comparison of social skills in delinquent and nondelinquent adolescent girls using a behavioral role-playing inventory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 49, 959-967.
- Germann, P.J., Aram, R. & Burke, G. 1996 Identifying patterns and relationships among the responses of seventh-grade students to the science process skill of designing experiments. *Journal of Research in Science Teaching*, 33, 79-99.
- Goldstein, A.P., Sprafkin, R.P., Gershaw, N.J. & Klein, P. 1986 The adolescent: social skills training through structured learning. In G. Cartledge, & J.F. Milburn (Eds), *Teaching social skills to children: Innovative approaches*. 2nd ed. New York: Pergamon Press. Pp.303-336.
- Gresham, F.M. 1986 Conceptual issues in the assessment of social competence in children. In P.S. Strain, M.J. Guralnick, & H.M. Walker (Eds.), *Children's social behavior: Development, assessment, and modification*. New York: Academic Press. Pp.143-179.
- Gresham, F.M. & Elliott, S.N. 1990 *The Social Skills Rating System*. Circle Pines, MN: American Guidance, Inc.
- Griffith, M.A., Dubow, E.F. & Ippolito, M.F. 2000 Developmental and cross-situational differences in adolescents' coping strategies. *Journal of Youth and Adolescence*, 29, 183-204.
- Hawkins, J.D., Jenson, J.M., Catalano, R.F. & Wells, E.A. 1991 Effects of a skills training intervention with juvenile delinquents. *Research on Social Work Practice*, 1, 107-121.
- Holahan, C.J. & Moos, R.H. 1987 Personal and contextual determinants of coping strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 946-955.
- Hover, S. & Gaffney, L.R. 1991 The relationship between social skills and adolescent drinking. *Alcohol and Alcoholism*, 26, 207-214.
- Inderbitzen, H.M. & Foster, S.L. 1992 The teenage inventory of social skills: Development, reliability, and validity. *Psychological Assessment*, 4, 451-459.
- 石隈利紀 1999 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房

- Kadish, T.E., Glaser, B.A., Calhoun, G.B. & Ginter, E.J. 2001 Identifying the developmental strengths of juvenile offenders: Assessing four life-skills dimensions. *Journal of Addictions and Offenders Counseling*, 21, 85-95.
- 樫野 潤 1988 社会的技能研究の統合的アプローチ (I) - SSIの信頼性と妥当性の検討 関西大学大学院人間科学, 31, 1-16.
- Kennedy, M.G., Felner, R.D., Cauce, A. & Primavera, J. 1988 Social problem solving and adjustment in adolescence: The influence of moral reasoning level, scoring alternatives, and family climate. *Journal of Clinical Child Psychology*, 17, 73-83.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- Landman, J.T., Irvin, L.K. & Halpern, A.S. 1980 Measuring life skills of adolescents: Tests for Everyday Living (TEL). *Measurement and Evaluation in Guidance*, 13, 95-106.
- MacNeil, K.M. 1997 The informal teacher social skills rating matrix: Further investigation of technical characteristics. *Dissertation-Abstracts-International: Humanities & Social Sciences*, 57, 2858.
- Martin, C.V. 1980 Social skill development in delinquent adolescent patients. *Corrective and Social Psychiatry and Journal of Behavior Technology, Methods, and Therapy*, 26, 35-36.
- Matson, J.L., Rotatori, A.F. & Helsel, W.J. 1983 Development of a rating scale to measure social skills in children: The Matson Evaluation of Social Skills with Youngsters (MESSY). *Behaviour Research and Therapy*, 21, 335-340.
- Merrell, K.W. 1993 Using behavior rating scales to assess social skills and antisocial behavior in school settings: Development of the School Social Behavior Scales. *School Psychology Review*, 22, 115-133.
- Miller, D.C. & Byrnes, J.P. 2001 To achieve or not to achieve: A self-regulation perspective on adolescents' academic decision making. *Journal of Educational Psychology*, 93, 677-685.
- Moos, R.H. 1990 *Coping Response Inventory-Youth Form, Preliminary Manual*. Palo Alto, CA: Stanford University Medical Center.
- 内閣府 2002 平成13年度青少年白書-21世紀を迎えるの青少年健全育成の新たな取組
- Pekarik, E.G., Prinz, R.J., Liebert, D.E., Weintraub, S. & Neale, J.M. 1976 The Pupil Evaluation Inventory: A sociometric technique for assessing children's social behavior. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 4, 83-97.
- Poole, M.E. & Evans, G.T. 1988 Life skills: Adolescents' perception of importance and competence. *British Journal of Guidance and Counseling*, 16, 129-144.
- Riggio, R.E. 1986 Assessment of basic social skills. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 649-660.
- Robin, A.L., Koepke, T. & Moye, A. 1990 Multidimensional assessment of parent-adolescent relations. *Psychological Assessment*, 2, 451-459.
- Staver, J.R. & Small, L. 1990 Toward a clearer representation of the crisis in science education. *Journal of Research in Science Teaching*, 27, 79-89.
- Tobin, D.L., Holroyd, K.A., Reynolds, R.V. & Wigal, J.K. 1989 The hierarchical factor structure of the coping strategies inventory. *Cognitive Therapy and Research*, 13, 343-361.
- 戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二 1997 中学生の社会的スキルと学校ストレスとの関係 健康心理学研究, 10, 23-32.
- 戸ヶ崎泰子・嶋田洋徳・坂野雄二・上里一郎 1995 社会的スキルの変化が友人関係と学校不適応に及ぼす影響 日本行動療法学会第21回大会発表論文集, 180-181.
- Wahler, R.G. & Dumas, J.E. 1986 "A chip off the old block": Some interpersonal characteristics of coercive children across generations. In P.S. Strain, M.J. Guralnick, & H.M. Walker (Eds.), *Children's social behavior: Development, assessment, and modification*. New York: Academic Press. Pp. 49-91.
- Walker, H.M., Stieber, S. & Eisert, D. 1991 Teacher ratings of adolescent social skills: Psychometric characteristics and factorial replicability across age-grade ranges. *School Psychology Review*, 20, 301-314.
- Weinstein, C.E. & Palmer, D.R. 1990 *Learning and Study Strategies Inventory-High School Version: User's manual*. Clearwater, FL: H & H.
- WHO 川畑徹朗 (監訳) 1994 ライフスキル教育 大修館書店 (World Health Organization: Division of Mental Health 1993 *Life skills*)

*education in schools*. Ann Arbor, MI: University  
Microfilms International.)  
Zigmond, N., Kerr, M.M., Schaeffer, A., Brown,  
G.M. & Farra, H.E. 1986 *School survival skills*

*curriculum*. Pittsburgh, PA: University of  
Pittsburgh.

(受稿5月21日:受理3月20日)